

男女平等、日本は過去最低 上野千鶴子氏に聞く

仕組みが意識を変ええる

世界経済フォーラムが2019年末に発表したジェンダー・ギャップ指数で、日本は153カ国中、過去最低の121位となった。下落する一方の日本に今、何が必要なのか。認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)の上野千鶴子理事長に話を聞いた。

ジェンダーギャップ 121

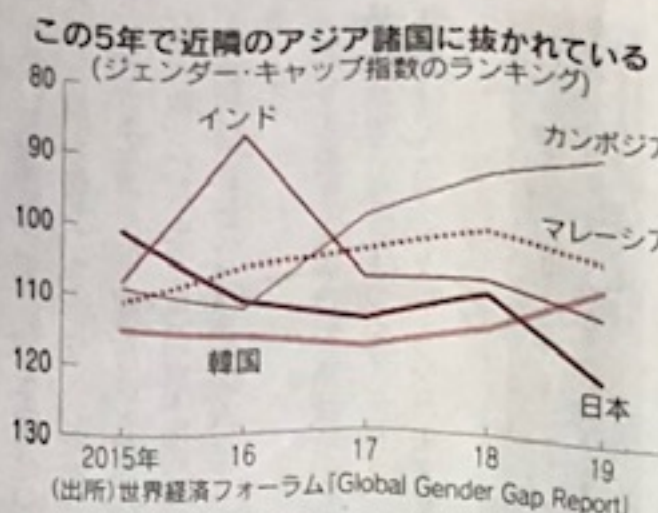


「国連の女性差別撤廃委員会(CEDAW)が日本に出す勧告がいろいろあります。選択的夫婦別姓などを早くから指摘されているのに何もしない。選択的夫婦別姓の導入はコストがゼロで効果が出る施策なのにそれでもやらない。政権与党に本気で変える気がないからです」

女性活躍推進法などの法整備は進みました。

「罰則規定がないので実効性がありません。例えば、候補者ができるかぎり男女同数になることを目指した候補者男女均等法。法律が施行されて初めての国政選挙となった19年7月の参院選はどうでしたか。候補者の女性比率はわずか28%です。自民党に至っては15%にとどまっています。結果、女性の当選者は28人で改選前後で変化がありません。法律を作った効果はゼロといえます」

「候補者の半数を女性にしない政党には交付金を出さないな



「風土合わない」は非合理的 骨抜きの法律効果はゼロ

どの罰則規定が必要です。女性活躍推進法では応募者と採用者の男女比も公表すべきです。こんな骨抜きの法律に対してメディアも鈍感すぎます」

「20年に女性管理職を30%にするという目標も達成は難しいです」

「最初に聞いたときはなぜ50%じゃないの?と思いました。ただ、意思決定の場に女性ももっと入っていく必要があることは確かです」

「他の国は強制力のあるクォータ制を導入して社会を変えてきました。過渡期に一次的にも強制力のある制度を作ることは大きな意味がありますが、日本では「クォータ制は日本の風土に合わない」と否定的です」

「日本の風土に合わない」という言葉が意味するのは「合理的な説明ができない」ということです。論理的に答えられないから質問をシャットアウトするために使っているのです」

「この状況から脱するには何が必要でしょうか」

「家事や育児など女性が外で働くことを妨げている負担をアウトソーシングする必要があります」

「女性の側の抵抗も根強いものではありませんか」

「インフラが変われば、意識はあつという間に変わります。それを痛感したのは介護保険。導入時には「自宅に他人を入れるなんてとんでもない」と否定的でしたが、今はどうでしょう」

「育児を家事労働者に委託したら、3歳までは年に200万円、3歳から5歳までは100万円、5歳から小学生までは50万円、小学生から中学生までは30万円、中学生から高校生までは20万円、高校生から大学生までは10万円、大学生からは5万円、というように段階的に減額していきませんか。日本は後者に舵を切っています」

「育児休業ははあまりいい制度とは思いません。男性より賃金の低い女性が育児を取るケースが多いですが、乳児と24時間向き合ったり休業は母親を育児休業にさせます。産前は対等だった夫婦の関係が、1年の育児で変わり、家庭内で役割分担が固定します。女性たちもべったり休業ではなく1日1時間でも職場とつながっていたいと希望してはいたはず」

「べったり休業を、というのであれば父親の取得を義務化すべきでしょう。これも日本の企業風土に合わないと言われそうです。でもスウェーデンも導入時には反対する男性もいたけれど、やったら大歓迎でした」

「働く女性は3000万人を超えましたが、6割が非正規雇用です。男女の賃金格差も大きな問題です」

「シンプルに解決方法があります。最低賃金を全国一律で1500円にすること。年2000時間で3000万円の収入になります。この年収は夫婦の関係を变える分岐点です。パートナーの年収が300万円を超えると生活水準が変わり、お互い相手が辞めないように、という力学が働きます」

連載「ジェンダーギャップ121」は随時掲載します。

取材を終えて

ランキングは4つの分野で構成される。日本は教育(91位)、健康(40位)に対して経済(115位)、政治(144位)が著しく劣るのが特徴だ。さらに詳しく見ると、政治における「閣僚の男女比」(139位)と「国会議員の男女比」(135位)、経済分野での「管理職の男女比」(131

「風土」議論の場を

位)に行き着く。改善ポイントははっきりしている。

「海外は同じ問題を解決するために、過去にあらゆる方法をとってきた。成功例はいくつもあるから、後発の日本は外国の成功・失敗に学べばいい」と上野氏は話す。それができずに今回も順位を下げた。風土とはなにかを明らかにし、どうしたいのか議論する場を広げたい。

(女性面編集長 中村奈都子、南優子)